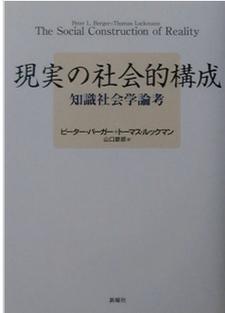


アイデンティティって、何？

八戸学院大学短期大学部 学長 杉山 幸子

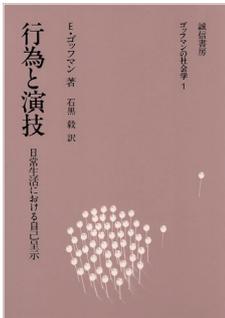
発達心理学や教育心理学のテキストには、大抵の場合、青年期の課題はアイデンティティの確立であると記されています。これがどういう意味なのか、よく分からないと思った（元）大学生も多いのではないのでしょうか。「自分」について悩むのは青年の特権ではありません。大人になった今、改めて考えてみるのも悪くない？



現実の社会的構成 知識社会学論考

ピーター・バーガー、トーマス・ルックマン

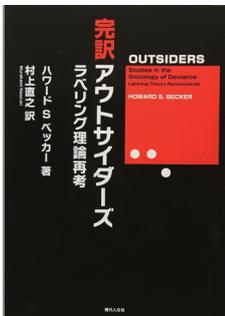
私が読んだのは70年代に出版された旧版ですが、そのタイトルは「日常世界の構成—アイデンティティと社会の弁証法」でした。当時、いわゆる「自分探し」が流行っていましたが、日常世界を離れたところに「本当の自分」が存在するなんていう幻想を抱いている人はこれを読み！と思ったものです。



行為と演技 日常生活における自己呈示

アーヴィング・ゴッフマン

よく知られているシェイクスピアの名言「この世はすべて舞台だ。男も女もその役者に過ぎない」が日常の文脈においてリアルに記述・分析されていて、読みながら、そうそう、あるある、と膝をうってしまうことがしばしばです。こんな社会学の本は珍しいのでは？



完訳 アウトサイダーズ ラベリング理論再考

ハワード・ベッカー

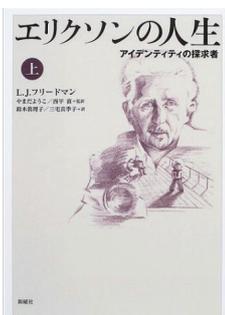
1960年代に刊行（78年に翻訳）されたフィールドワークの古典で、2000年代に入って改めて完訳が出版された（私が読んだのはもちろん古い方の翻訳本です）。マリファナ使用者、ダンス・ミュージシャンなど、逸脱者のラベルを貼られた人々の生態を描いていて、薬物でハイになるにも学習が必要(!)という指摘にいたく感動したことを覚えています。



人はなぜ認められたいのか アイデンティティ依存の社会学

石川 准

人は「存在証明」に躍起になる生き物である！ つい忙しさをアピールしてしまう、なぜか遅刻をしてしまう、私たちの習性に気づきを与えてくれ、障害者、障害児の親、LGBTなど「マイノリティ」である人々の日常とアイデンティティ（存在証明）に迫る刺激的な書。前著『アイデンティティ・ゲーム』とどちらをおすすめするか、迷いました…



エリクソンの人生 アイデンティティの探求者 上・下

ローレンス・フリードマン

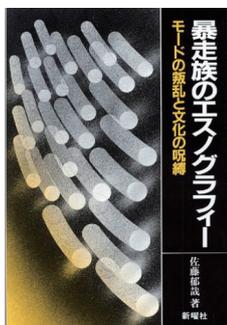
アイデンティティという概念を提唱し、世界中に広げた張本人であるエリクソンの人生の物語が美しい文章で綴られ、彼が実に魅力的な人物だったことが伝わってきます。また、『脱アイデンティティ』で「誰がアイデンティティ概念を必要としたのか？」と述べられているように、彼がその概念を編み出したのはいわば必然であったことが納得できます。



子供の異文化体験 人格形成過程の心理人類学的研究

箕浦 康子

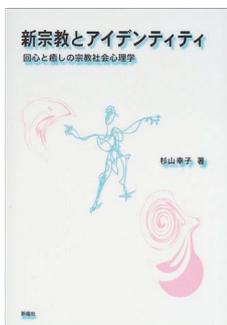
人生のある時期を海外で過ごした人の文化的アイデンティティを丁寧なケーススタディによって描き出した良書。何についても言えることですが、「帰国子女」のようなラベルで人を一括りにすることの無意味さがよく分かります。こんな研究をしてみたいと憧れたことを思い出します。



暴走族のエスノグラフィ モードの叛乱と文化の呪縛

佐藤 郁哉

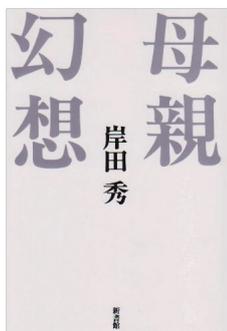
1年間に渡って暴走集団で参与観察を行い、インタビューやアンケート調査などさまざまな手法を用いて「暴走する若者」の物語に接近したフィールドワークの名著。いわゆる扇情的な「潜入レポ」ではなく、あくまで丁寧にアカデミックに対象に迫り、その内的な世界を解き明かそうとしているのが魅力的です。



新宗教とアイデンティティ 回心と癒しの宗教社会心理学

杉山 幸子

今はどうか分かりませんが、30年ほど前は、学生が研究のために調査に行くのを快く受け入れてくれる方たちがありました。著者自身はまったくスピリチュアルでないのに、情緒的な共感を抜きにして信者の方のアイデンティティ形成に迫ろうと試み、どの程度成功したかはともかく、日常の他者との関わりが人のアイデンティティを支えていることを実感しました。



母親幻想

岸田 秀

アイデンティティ論ではありませんが、「母親」というアイデンティティを獲得することの困難さについて洞察が得られます。子育て中の人にも、母親との関係に居心地の悪い思いを抱いている人にも、全然そうでない方にもおすすめです。著者と母親との葛藤を冷徹に分析した『フロイドを読む』（残念ながら絶版…）も怖くて面白いので、探せたらぜひ。



脱アイデンティティ

上野 千鶴子

序章の「脱アイデンティティの理論」が秀逸。アイデンティティの学説史が分かりやすく解説されており、このためだけにでもこの本を買う価値があるかも。さらに、単一のアイデンティティの確立が幻想となった時代のアイデンティティについて、さまざまな角度から刺激的に論じられています。

八戸学院大学
短期大学部 学長
すぎやま さちこ
杉山 幸子

同級生が高校時代に次々と宗教にはまっていくのを見て、アイデンティティの変容というテーマに関心を持った。大学と大学院時代に細々とフィールドワークを続け、30代で子育てをしながら何とか博士論文を仕上げ、現在は保育者を目指す学生に発達心理学を教えている（というのがメインのアイデンティティです）。



ハブブックセンター
HACHINOHE BOOK CENTER

〒031-0033 青森県八戸市六日町 16-2 Garden Terrace 1F
TEL 0178-20-8368 web <https://8book.jp/>